

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## カンバのチョンドと女性の生活

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 富士子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/3552">http://hdl.handle.net/10502/3552</a>

## カンバのチョンドと女性の生活

上 田 富 士 子\*

はじめに	2. チョンドにみる女性の生活
1. チョンド製作の過程	1) 外出とチョンド
1) 糸を撚る	2) 贈り物とチョンド
2) 染色	3) 収穫とチョンド
3) チョンド編み	4) クラン会議とチョンド
4) チョンドの模様	おわりに

### はじめに

この小論の目的は、ケニアのカンバ (Kamba) 民族<sup>1)</sup>の女性たちが物を入れて運ぶ袋物「チョンド (*kyondo*)」を取り上げ、その製作過程を具体的に記述し、さらにチョンドという一つの物質から、カンバの女性の生活を明らかにしようと試みるものである。カンバでは、アフリカの他の多くの民族にも見られるように、男性と女性という性の分類が、生業、労働、価値観、人間観や世界観などにも見られ、いろいろな分野で人間の基本的な分類の基準となっている。ここで取り上げるチョンドという袋物は、女性によって作られ、女性によって所有され、女性によって使用されるものであり、男性が全くタッチすることのない、女性の領域のものである。カンバの女性は、老いも若きも誰もがチョンドを編み、大小さまざまなチョンドを所有し、使っている。女性たちは、外出する時はどこへ行くにもチョンドを持って出かけ、ものを運ぶ時はなんでもチョンドに入れて運ぶ。また、いつも編みかけのチョンドを持っていて、いえで休憩している時(写真1)やおしゃべりをしている時はもちろん、訪問先や集会で、

\* 福岡国際大学国際商学部

1) カンバ(Kamba) 民族はケニアに住むバンツー系の一民族で、人口は約173万人(1979年人口センサス)である。カンバランドは九州と同じくらいの面積であり、その北部は広大な叢林地帯となっており、そのなかに人家と畑が、かなりの距離をおいて点在している。人びとはトウジンビエ、トウモロコシ、マメなどの農耕を営み、ウシ、ヤギ、ヒツジなどの家畜を飼って生活している。なお、この小論に使用する資料は1970年4月より1988年2月まで5回、通算6年5か月間にわたって行なった調査によるものである。

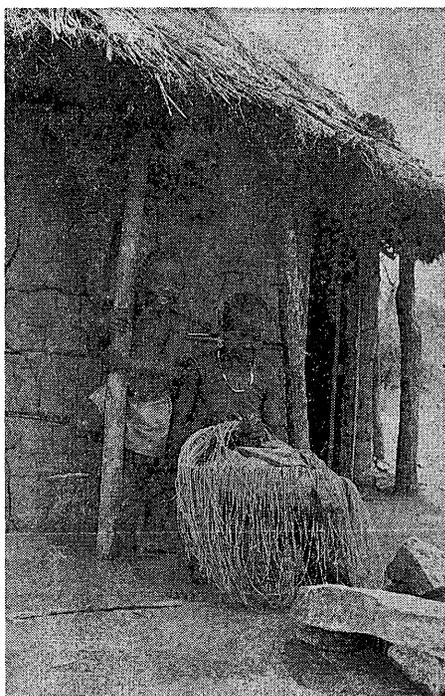


写真1 孫の子守りをしながらチョンドを編んでいるおばあさん

あるいは、叢林の小道を歩いている時にはいつでも、手はせっせと動かしてチョンドを編んでいる。カンバの女性にとってチョンドは、女性の生活、女性の一生と切り離すことのできない重要なものである。

ここではまず、第1章でチョンドが作られる過程を記述する。カンバのチョンドがどのようにして作られるのか、その製作過程について、例えば、チョンドの材料、糸の撚り方や染色の方法、チョンドの編み方などチョンドの出来上がるまでの過程について述べ、さらにチョンドの模様や種類についても明らかにする。このことはカンバの人びとの、物を作る伝統技術は勿論、色彩感覚や美意識について考慮する上でもいろいろと示唆を与えてくれるものと思う。第2章では、チ

ョンドという一つの物質から、カンバの女性の生活の諸側面を描くことにする。すなわち、女性の生活、例えば、外出、訪問、収穫などにおいてチョンドがどのように使われているかを記述することにより、カンバ社会における運搬の方法、交換の様式、人間関係のあり方などについて明らかにしたいと思う。

## 1. チョンド製作の過程

### 1) 糸を撚る

チョンドを編む糸の材料は、「ムアンバ(*muamba*, バオバブ)」(写真2)という木の内側の樹皮である。カンバ北部の広大な叢林地帯には、いたるところにムアンバの巨木が見られ、人びとの生活と関係が深い。雨季には葉の生い茂るムアンバの木陰は、人びとの恰好の憩いの場となる。ムアンバの枝には蜜蜂の巣箱が掛けられている。ムアンバの実は食用とされ、特に子ども達が好んで食べる。また、ムアンバの木には、いろいろな精霊が宿っていると信じられており、多くの宗教行事がムアンバの木の下の

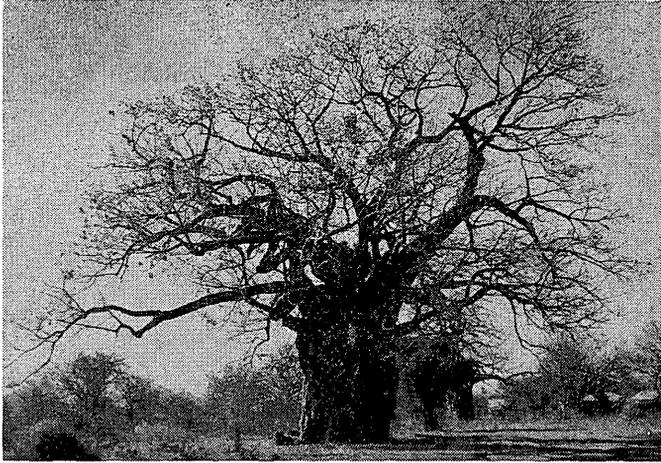


写真2 ムアンバの木。チョンドの材料は、この木の内樹皮で作られる

で行なわれる。例えば、雨の精霊「ララ (Lala)」への雨乞い儀礼もムアンバの木の下に50人、100人と女性たちが集まって行なわれる。ただ、ムアンバは根が浅く、大雨や雷で倒れやすいので、この木のそばには、人は決していえを建てたりはしない。

ムアンバの幹の黒っぽい表面の硬い皮を山刀などで叩き切るようにしてはがし、その内側の淡いベージュ色をした樹皮を山刀で切り取る。この切り取った樹皮を「イカボ (ikabo)」という。このイカボがチョンドを編む糸の材料である。まず、イカボを口の中で噛めるくらいの大きさに小さく丸める。これを口の中に入れてよく噛むのである。何度も噛んでいるうちに、繊維と滓とに分けられてくる。この滓は唾液と一緒に吐き捨てられ、口の中には、やわらかくなった繊維質だけが残る。カンバの女性は叢林の小道を歩いている時、いえで手仕事をしている時、いつも口ではこれを噛み、「ペッ／ペッ／」と滓を唾と一緒に吐いている。この時の噛み方が足りないと撚られた糸は粗く、出来上がったチョンドの肌ざわりが悪いといわれる。女性の口の中で噛まれ、やわらかくなった繊維はカンバ語で「イヤンビ (ikambi)」と呼ばれる。これを自然乾燥させたのち、糸を撚るのであるが、この乾燥した繊維は「ウリー (ulii)」と呼ばれ、唾液で湿った状態のイヤンビとは区別される。このウリーを沢山の細いひも状の繊維に裂く、左足を軽い縦ひざにしてすわり、左手に持った2本の細いウリーをのせて前後にこするようにして糸を撚っていくのである。こうして糸を撚ることをカンバ語で「クオコザ (kuokoza)」という。左手で絶えず調整をしながら、撚っているウリーが終りに近づくと新たにウリーを継ぎ足しながら、長い糸を撚っていくのである。このクオコザはチョンドを編むことよりもむつかしいといわれる。撚られた糸は10セ

ンチメートル幅くらいに束ねられる。こうしてチョンドを編む糸が準備される。このムアンバの糸は大変丈夫なもので、カンバでは例えば、ひょうたんのひび割れを繕ったり、ネックレスやブレスレットなどのビーズ製品を作る糸にもこれが用いられる。

## 2) 染 色

撚られた糸はムアンバの内樹皮の色である淡いベージュ色をしており、したがってチョンドの基本の色もこのベージュ色である。チョンドは、その骨組みとなる縦糸と横糸とで編んでいく。この縦糸をカンバ語で「ウニェンゼ (*unyenze*)」といい、横糸を「キインガ (*kiinga*)」という。縦糸ウニェンゼには染色は一切なされない。これはチョンドとして出来上ると縦糸は表面に全く出ないからであり、そのままの色で使われる。これに対し、横糸キインガは、そのままのベージュ色で使われるほか、黒と赤の2色の色に染められる。染料としては、赤い色には赤土を水でこね、長さ15センチメートルくらいの細長いかたち<sup>1)</sup>に固めたものが使われる。これはカンバ語で「ブー (*mbuu*)」<sup>2)</sup>とよばれ、市などで売られている。また、黒い色には、かまどの煤「ビヨ (*mbio*)」<sup>3)</sup>が使われる。染色の方法は、赤い色の場合は、ブーを適当な大きさに割り、真ん中の少しへこんだ平らな石の上において砕き、水を加えて溶き、赤い液を作る。これに糸を浸して赤く染めるのである。黒く染めるのはかまどの煤を使うと述べたが、かまどは3つの石からなっており、女の小屋<sup>2)</sup>の中央の柱の手前にある。女性はこのかまどで煮炊きをする。かまどの3つの石の間の三方から薪をくべ、素焼きの壺やスフリア(薄いアルミの取手のない円形の鍋)で煮炊きをするのであるが、この壺やスフリアの底、かまどの石には、いつも真黒い煤がついている。これに、水を浸したムアンバの糸をこすりつけ、また、水に浸してはこすりつける。これを何度も繰り返して糸を黒色に染めるのである。こうして横糸にはベージュ色の糸の他に、赤色の糸と黒色の糸が準備され、この3色の糸をうまく組み合わせることにより、チョンドの模様が編み出されていくのである。

## 3) チョンド編み

カンバの女性にとってチョンドは物を入れて運ぶ唯一の袋物であり、小物入れ、買い物入れ、収穫物入れとその用途はひろく、多様である。したがってチョンドもそれ

2) 小屋は草おきで土壁の丸い小屋である。小屋の中心に柱があり、女の小屋にはその手前に3つの石からなるかまどがある。このかまどが、その小屋が女の小屋であることをあらわしている。男の小屋にはかまどはない。女の小屋は、子どもが生まれると夫が妻に建ててやる。これは女性がはじめて手にする自分の世界である。

ぞれの用途に応じて編まれ、その大きさもいろいろであるが、一般に広く編まれ、よく使われているのは、直径約40センチメートル、深さ約35センチメートルくらいのもので、直径約25センチメートル、深さ約20センチメートルくらいのもので、直径約20センチメートル、深さ約15センチメートルくらいのものであり、だいたい大中小3種類の大きさに大別される。このほかにも、さらに小さな子ども用のチョンドや、もっと大きな特大のチョンドもある。特大のチョンドは穀物貯蔵小屋に穀物を入れて保存しておくために使われるものである。

チョンドは道具は使わず、手で編まれる。カンバ語でチョンドを編むことを「クショナ チョンド (*kusyona kyondo*)」

あるいは「クワムビア チョンド (*kwambya kyondo*)」という。チョンドはどんなに大きなものでもどんなに小さなものでも編み方は同じである。底の中心から多数の横糸を放射状に出し、中心から螺旋状に編んでいく。指先を使って縦糸の一本を拾い、これを二本の横糸で挟んでよじり、次の縦糸をまた二本の横糸で挟んでよじるといった動作を繰り返して編んでいく。二本の横糸はチョンドの表と裏に交互に出るようになる。チョンドの底は平らかな円形に編まれ、側面はその円形のまわりをそのまま編みあげていく(写真3)。編み終ると余った縦糸を切って始末し、糸が解れないようにチョンドの口をムアンバの糸でくけて仕上げる。最後に口の両端二カ所に耳をつける。これはカンバ語で「キクワトゥ (*kikwatu*)」といわれ、その作り方は、古い布切れを細長く丸めて芯を作り、その表面をくるむように糸で編んで覆う。これを輪にしてチョンドの口の両端に縫い付けてチョンドは完成する。チョンドを使う時は、この両耳に牛皮の紐の両端を通して結び、使う。紐の長さは使う人の身長によって異なるので、人にチョンドを作ってやる場合は、紐をつけずにおくのが普通である。



写真3 編みかけのチョンド。黒と赤に染色された糸を使って模様を表現する

#### 4) チョンドの模様

チョンドの模様は横糸の3色、つまり、糸の地色である淡いベージュ色を基本とし、これに染色された赤色と黒色、この3色の組み合わせによって作られる。女性たちの持っているチョンドを見るとそれぞれに模様が異なり、さまざまな模様があるように見える。が、カンバの人びとがチョンドの模様としてあげるのは、「イバンドウ (*ivandu*)」、「ムソング (*musonge*)」、「キレゲレゲ (*kiregerege*)」の3つである。イバンドウというのは、赤あるいは黒の一角で何段も編んでいくもので、チョンドの地色に入る赤あるいは黒の大きな横縞模様である。キレゲレゲというのは、それぞれ色の異なった2本の横糸で数段編んで出来る格子模様である。この3つの模様が基本の模様である (図1-(1))。そして例えば、イバンドウとムソングを組み合わせたり、キレゲレゲを変化させて縦縞模様を作るなどして、いくつもの複雑な模様が作られるのである (図1-(2))。カンバの女性たちは、隣近所の女性あるいは親しい女性の編んだチョンドを、そのチョンドの模様を見て、それが誰のチョンドであるかがわかるほど、人によって好みの模様がある。前にも述べたように、カンバの女性は誰でもチョンドを編む。チョンドの編めない女性はいない。しかし当然のことながら、上手下手はあり、あの人はチョンドを編むのがうまいとか、あのうちのおばあさんの編んだチョンドは素晴らしいとか、あるいは、彼女のチョンドは駄目だななど、人びとはうわさする。ではチョンドの良さはどういうことできるのでしょうか。それはまず第一に手で触れた感触がやわらかいことである。そのためには前述したように、ムアンバの内樹皮を口で噛む時に時間をかけてよく噛むことである。これを中途半端に噛んで撚られた糸を使って編まれたチョンドはざらざらして肌ざわりがよくない。第二に、底がでこぼこせず、一枚の円形の板のように平らであること。第三に編み目が揃っていること、第四に赤や黒の色が濃く、鮮やかにでていること。これは糸の染色が十分になされて

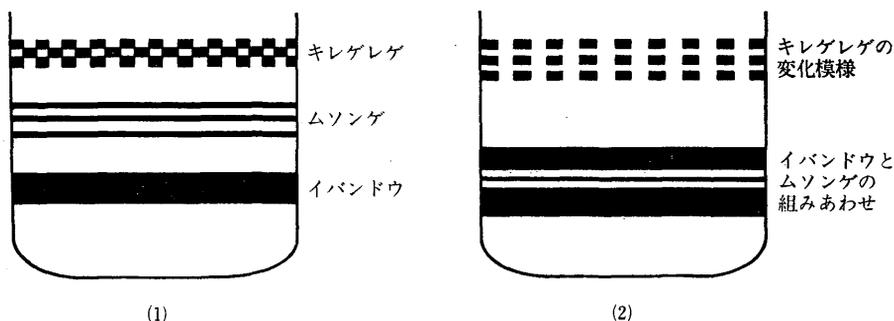


図1 チョンドの模様

いることが重要である。そして最後に、これはその人の好みや感性の問題であるが、チョンドの模様や形が全体として調和がとれ、美しいことである。カンバの女性は友人や近所の人が新しいチョンドを持っていると、すぐ手にとっていろいろと見ては感想をいい、品定めをする。また、編みかけのチョンドを持っている人に出会うと、それを手にしていろいろと聞いたり批評したりして必ず、数段編んでやる。このような態度は相手への礼儀であり、彼女たちの楽しみの一つでもある。

## 2. チョンドにみる女性の生活

### 1) 外出とチョンド

女性は老いも若きも外出する時はチョンドを持って出かける。村の中央にある店や週一回開かれる市に買い物に出かける時は、空のチョンドを肩にかけ、あるいは、チョンドの紐を首にしてチョンドを背中に回し、出かける。そんな時、手には必ず編みかけのチョンドを持っていく。途中、叢林の小道の2時間、3時間とかかる道程を編みながら行くのである。店や市では砂糖、塩、バナナ、マンゴー、薬品、スカーフ、オイル、洗剤などの小さな物から、衣類、ウシやヤギの肉、ひょうたんにいたるまで、買った品物はチョンドに入れて運ぶ。マメやトウジンビエなどの穀物をチョンドに入れて運ぶ時はチョンドの口を縫い合わせ、こぼれないようにする。この時使われる糸は、チョンドを編む糸と同じムアンバの糸である。チョンドを背負う方法は、まず、チョンドの革紐を額で支え、うしろにまわしてチョンドを背中で背負う。したがって



写真4 チョンドを背負って叢林の小道を歩く少女

重い物を背負う時は少し前かがみの姿勢になる。手は頭の上で革紐を押さえたり（写真4）、あるいは革紐を首の両横あたりで握ったりする。これがチョンドを背負う時の一般的なスタイルである。このスタイルはチョンドに限らず、カンバの女性が物を運ぶ時の、例えば、穀物の入った稲米袋、薪、水汲みの時の水の入ったひょうたんなどの運ぶ時の一般的なスタイルである。何十年と重い物をチョンドに入れて運んできた年老いた女性たちの額にはチョンドの革紐の食い込んだあとが見られる。

また、実家や親戚のうち、知人のうちに行く時には、「ウスー (*usuu*)」といってトウジンビエの粉を水で溶いて炊いた粥状の飲み物やトウジンビエの酒、自家製のサワーミルクなどをひょうたんに入れてよく土産に持って行く。この時、ひょうたんの表面は自家製のバターを塗って艶を出す。カンバでは付き合いの良いことは大変価値あることであり、その女性が付付き合いの良い女性かどうかは、彼女のひょうたんを見ればわかるといわれている。それは物のやりとりをするたびにバターを塗って艶を出すので、付き合いの良い女性のひょうたんはいつもつやつやと輝いているのである。ウスーやトウジンビエの酒やサワーミルクの入ったひょうたんはトウモロコシの芯で栓をし、チョンドに入れて持って行く。ムサンデ (*musande*, トウジンビエを炊いたものでカンバの主食である) やギマ (*ngima*, トウモロコシの粉を熱湯に入れ、こねながら炊いたもの) などの料理は、ゼレ (*nthere*, 半切れのひょうたんの器) や皿に入れ、別のゼレや皿で蓋をして、これもチョンドに入れて運ぶ。前述したようにチョンドは額で革紐を支え、背中背負うのであるが、食べ物や飲み物を運ぶ時は、キセコ (*kiseko*, 幅115センチメートル、長さ155センチメートル位の1枚の布切れ。畑仕事、家事、薪採りや水汲みと、女性はいつでもこのキセコを腰に巻いている。それは前掛けにもなれば、タオル、汗拭き、風呂敷、作業着にもなる) をチョンドの上からすっぽりとかぶせ、なかのものが見えないようにする。それは途中、ほこりやごみ、木の葉や棘、虫などが入らないようにするためでもあるが、しかし一番の理由は、途中、人に出会ってチョンドのなかを覗かれないようにするためである。人は他人のチョンドのなかを必ずといっていいほど覗き、吟味する。したがって覗かれて何かされる危険がある。特にムオイ (*muoi*, 神秘的な力を使って相手に病気、不運、死などをもたらす力・ウオイを持っている人) に出会ってチョンドのなかを覗かれると、なかの食べ物や飲み物にウオイ (*uoi*) をかけられる恐れがあり、これを防ぐためにキセコを用いてチョンドのなかの物が見えないようにするのである。

## 2) 贈り物とチョンド

贈り物や土産をもって人のいえを訪問する場合、相手のいえに着くと贈り物や土産はチョンドに入れたまま、そのいえの小屋の入り口の地面に置いておく(写真5)。そして、少し離れて待っている。しばらくしてそのいえの女主人がやってきて、訪問者に挨拶をし、地面に置かれたチョンドを小屋の中に運び入れる。しかし、この間、地面に置かれたチョンドやその中身については、互いに何も語らない。これがカンパにおけるものを贈る時の作法である。小屋の中で品物や料理を取り出されたチョンドはその持ち主が帰るまで小屋の中央の柱か土壁にかけておかれる。客が帰る時は、そのいえの女性たちが数名、からのチョンドを持って途中まで送っていく。しばらく、叢林の小道を見送ってゆき、別れの挨拶をする時になってはじめて、チョンドを持ち主である客に手渡す。客は、からのチョンドを貰って帰る。カンパの女性は、客のチョンドを持って必ず少し送っていく。これが訪問を受けた者の客への礼儀なのである。贈り物や土産を入れてきた器は、後日、それにお返し品の品を入れて返しに行かなければならない。

ところで、カンパでは娘が恋人を訪ねる時は、よく贈り物を持っていく。贈り物としてはバナナやマンゴーなどの果物、イキエ (*ikie*, トウジンビエの粉をサワーミルクで溶いたもの、おやつとして食される)、トウジンビエの粉などが一般的である。このような贈り物をチョンドに入れて恋人である若者の小屋を訪ねてくるのであるが、この時娘が用いるチョンドは普段、彼女が使っていないこの時のためにのみ使うチョンドである。娘が外出用に使うチョンドは直径20センチメートル、深さ15センチメートル

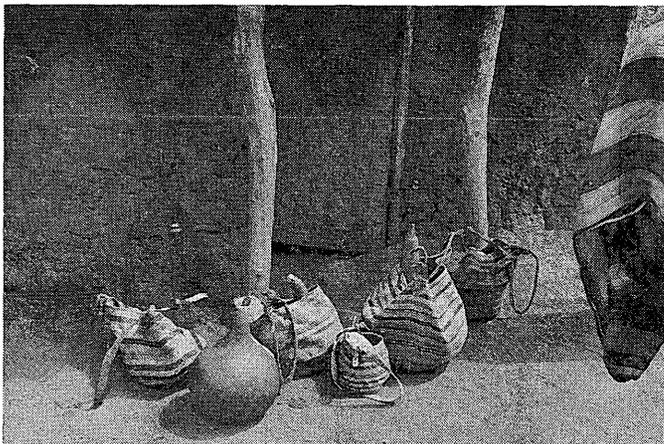


写真5 訪問先の小屋の入口に置かれた贈り物。運んできたチョンドに入れたまま小屋の入り口に置く

ルくらいの小型のチョンドで、これは彼女たちのハンドバッグといったところである。娘が恋人を訪ねる時にだけ用いるチョンドも、サイズの小型のチョンドであるが、これは秘密にして使われるので、よほど親しい人でない限り、他人が見てもそれが誰のチョンドであるかわからない。恋人の小屋を訪ずれると、娘は贈り物をチョンドに入れたまま、若者に手渡す。若者は自分の姉妹か兄嫁、あるいは祖母に、「僕の小屋にチョンドがあるから母さんのところに持って行ってくれ」と言う。このような贈り物は若者一人で食べるといったものではなく、彼の母親によって、家族の者、特に女性や子ども達に分配され、みんなで食されるのが習わしである。ただ、カンバでは、母親と息子というのは大変強い畏敬関係にあるので母親は息子の小屋に入ることはできないし、また、息子も自分の恋人の贈り物を直接、母親に手渡すことはできない。こんな時、贈り物の入ったチョンドを母親のところに持っていったり、訪ねてきている娘にはお茶や料理を出して持てなしたりするのは若者と冗談関係にある彼の姉妹に兄嫁、祖母などである。ただ、彼女たちを通して母親は訪ねてきている息子の恋人について実にくわしく知ることができるのである。なお、この場合、からのチョンドは、すぐに娘に返されるのではなく、次に彼女が訪ねてくる日までそのまましておかれる。ただし、これは息子の小屋にも母親の小屋にも置かれることはない。なぜなら、チョンドは女性の持ち物であり、また、母親と息子の恋人とは息子を通して畏敬関係にあるからである。チョンドは彼の姉妹か兄嫁、あるいは祖母の小屋の、しかも人目に付かぬ所に置いておかれるのが習わしである。そして、次に娘が訪ねて来る前日に、いへの者は娘への土産の品をそのチョンドに入れてお返し準備をしておかなければならない。

### 3) 収穫とチョンド

畑の作物を収穫する時にもチョンドが使われる。カンバの農耕は焼き畑農耕で、主に主食のトウジンビエやトウモロコシ、マメ類などが作られる。年2回の雨季(10月～1月、3月～4月)が農作業の時期で、雨季の始めに植え付けをし、途中1回か2回除草をする。そして乾季の始めに収穫をする。収穫は女性の仕事である。トウジンビエは乾燥した後、穂だけを収穫する。手頃な大きさのチョンドを肩にかけ、矢じりで穂先だけを切ってチョンドに入れていく。肩にかけたチョンドが一杯になると地面に置かれている大きなチョンドに移す。これを繰り返して大きなチョンドが一杯になると、穀物貯蔵小屋へと運ぶのである。収穫の頃になると、トウジンビエやトウモロコシ、マメ類などのびっしりと詰まった大きなチョンドを畑からいへの貯蔵小屋へと

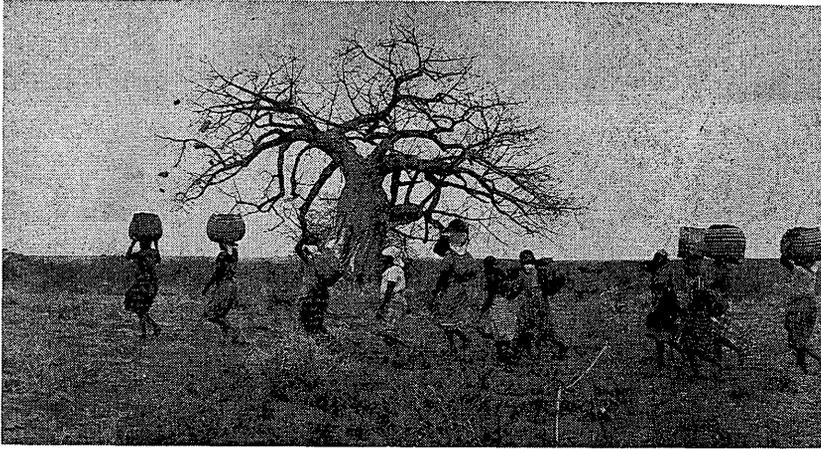


写真6 畑から収穫物をチョンドに入れて穀物貯蔵小屋へ運ぶ女性たち。うしろの木はムアンバの木である

運ぶ女たちの姿が叢林のあちこちで見られるようになる。カンバの女性たちは除草や収穫などの畑仕事を共同で行なうグループを作っている。このグループは隣近所や気のあった女性たちが20人、30人と集まって作られている。なかには50人からなる大きなグループもある。収穫の時期には同じグループの女性たちが集まり、メンバーたちの畑の収穫作業を共同で行ない、互いに助けあう。グループでの収穫作業は大勢の女性たちが農作業の合間、合間に歌い踊るといった大変にぎやかな光景がよく見られる。収穫物のびっしりと詰まった大きなチョンドを背負い、あるいは、頭に乘せて貯蔵小屋まで一列になって運ぶ女たちの顔は収穫の喜びにあふれ、その足取りも軽い（写真6）。カンバの女性がチョンドに物を入れて運ぶスタイルは前にも述べたようにチョンドの革紐を額で支え、背中でチョンドを背負うというものである。しかし、収穫物を大きなチョンドに入れて運ぶ時に限り、そのチョンドを頭の上に乗せて運ぶ人もいる。

#### 4) クラン会議とチョンド

カンバの社会は25のクランよりなる。各クランによる地域ごとにクランの長がおり、このクランの長を中心にその地域のクランの成員によるクラン会議が開かれる。クラン会議にはクランの成員であれば男性でも女性でも、老いも若きもだれでも出席することができる。クラン成員間のもめごとや紛争の調停や解決はクラン会議で行なわれる。親と子、夫婦、妻同士といった家族内のもめごと、成員間の土地争い、殺傷事件、妖術・邪術事件、ウシなど家畜が畑を荒らした事件、婚資未払い問題、離婚問題など

いろいろな問題やもめごと、紛争がクラン会議で調停・解決される。また、成員のどれかが殺傷事件を起こし、その賠償を払わなければならない場合、あるいは成員である子どもが学資に困っている場合にもクラン会議が開かれ、みんなで少しずつ出し合う。このようにクラン会議はその成員にとって重要な相互扶助の機関でもある。会議は一般には訴えた人のいえの近くの叢林で夕方から開かれ、夜明けまで続けられることが多い。クランの長を始め、各いえの長である古老たちを中心に焚火を囲んで開かれる。女性たち（主として妻たち）はムサンダイ（トウジンビエを炊いたもの、カンバの主食）、ウスー（トウジンビエの粉で作られた粥状の飲み物）や飲み水などを持ってやってくる。この場合も彼女たちはこれらをひょうたんやンゼレ（ひょうたんを縦半分にした器）に入れ、それをチョンドに入れて運んでくる。これら女性たちによって運んでこられた料理や水は出席者全員に配られ、食される。

ところで、クラン会議において、もめごとや紛争の調停・解決にあたり、例えば、人が他人のものを盗んでいるのに白状しなかったり、他人にウオイ（相手を病気や不幸にする神秘力）を行使しているのに否定し続けたり、あるいは、喧嘩をしたその罰として、鞭打ちが言い渡される場合がある。これはみんなの前に出され、木の枝で打たれるのである。そして、この時、チョンドが使われるのである。数名の見張り役の若者たちがそれぞれに長い木の枝の鞭を手に鞭打ちを言い渡された人を取り囲む。彼らのうちの誰か一人がクランの長に指名されて鞭を打つのであるが、この時、まず最初に鞭を打たれる人の頭にチョンドが被せられるのである。女性たちのチョンドの中から手頃なものが選ばれ、それを鞭を打たれる人の頭にすっぽりと被せ、首のところを紐で軽くしばる。それから、鞭を打つのである。チョンドは編み目が詰まっていてこれを被ると全く何も見えない。こうすると若者たちのうち、誰が鞭で打ったか、打たれた本人にはわからず、あとに恨みを残さなくて済むと人びとは説明する。クラン会議にもチョンドは無くしてはならないものの一つである。

## おわりに

以上、ムアンバ（バオバブ）の内樹皮を材料として編まれる、いわゆるカンバの伝統的なチョンドについて見てきたが、最近では、毛糸やナイロン糸で編まれたチョンドもよく見かけられるようになってきた。毛糸を使う場合は、表面に出ない縦糸にはムアンバの糸を使って腰を強くし、横糸に毛糸が使われる。横糸に毛糸を使うことによって、いろいろな色の模様を表現することができ、従来のページュ、赤、黒の3色

のチョンドに比べ、自分の好みの色を使った、しかも幾種類もの色を使ったチョンドを作ることができるようになった。その上、毛糸のチョンドはムアンバのチョンドに比べてやわらかく肌ざわりが良い。これも毛糸のチョンドが好まれる理由の一つである。また、最近、特に若い娘たちの間で流行しているのがナイロン糸で編まれたチョンドである。最近の急速な交通機関の発達や貨幣経済の浸透により、叢林の中の市にも都市の商人たちがやってきていろいろな日用雑貨や衣類が売られるようになった。したがって毛糸やナイロン糸も容易に手に入れることができるようになってきたこと、若い女性たちの間でテーブルクロスなどのレース編みが流行っていることなどと相まって、ナイロンの糸を材料にかぎ針でチョンドを編む娘たちが増えてきたのである。これはチョンドの形はムアンバのものと同じであるが、しかし、一本の糸をかぎ針で編むという編み方であり、従来の縦糸と横糸とで手で編むという方法とは全く異なったものである。娘たちの外出用のハンドバッグといった小型のチョンドはたいていナイロンの糸で編まれ、使われている。

ところで、毛糸のチョンドもナイロン糸のチョンドも一生使えるムアンバのチョンドに比べると弱く、長持ちしないのが欠点である。特にナイロン糸のチョンドは熱にも弱く、重い物を入れると伸びてしまう。したがって大きいチョンド、物を入れて運ぶチョンドには従来のムアンバのチョンドが使われる。また、ムアンバのチョンドは叢林にはえているムアンバの木の内樹皮から作られるので、材料は好むだけどれだけでも、しかも誰もが手に入れることができる。しかし、毛糸やナイロン糸は市で購入しなければならず、材料費が高つくき、現金収入の少ない村人にとっては誰もが買えるわけではない。

今日でも、カンバの女性はムアンバの糸でチョンドを編み、ムアンバのチョンドを使っている。チョンドの主流はムアンバのチョンドである。が、同時に、毛糸やナイロン糸を使い、バラエティーに富んだ色のチョンドを編み、使用しはじめた。勿論、材料や編み方、色彩はさまざまであるが、しかし、この場合でもチョンドの形や模様は伝統的なムアンバのチョンドと同じであり、女性の手仕事としてのチョンド編み、チョンドの使い方、チョンドで物を運ぶスタイル、チョンドとのかかわり方、チョンドへの思いは何ら以前と変りはない。彼女たちにとってチョンドは今日でもなくてはならない唯一の袋物なのである。ただ、今後、伝統的なムアンバのチョンドを作ることのできる人は少なくなってくるだろうと思われる。というのは、繊維を口で噛んだり、糸を撚ったりする若い女性の姿が見られなくなってきたからである。

## 付 記

本稿は、昭和62年3月20日におこなわれた国立民族学博物館の共同研究「アフリカ諸民族の技術誌の整理と分析」（代表者：和田正平）において報告した「カンバのチョンド」をもとに、討論の成果を加え、加筆修正し、論文として提出したものである。

## 文 献

川田順造

1979 『サバンナの博物誌』新潮社。

LINDBLOM, G.

1920 *The Akamba in British East Africa: an ethnological monograph.* Uppsala: Appelbergs Boktryckeri.

NDETI, K.

1972 *Elements of Akamba Life.* Nairobi: East African Publishing House.

上田 将

1980 「カンバのクラン会議」『季刊民族学』12: 78-91。

上田富士子

1974 「キセコとチョンド——カンバ族の女の持ち物」『アフリカの文化と言語』（月刊『言語』別冊）大修館書店, pp. 122-123。

1975 「ケニア・カンバ族における既婚女性の社会的地位と役割」『民族学研究』39(4): 337-349。

1982 「ケニア・カンバ族の女」綾部恒雄編『女の文化人類学』弘文堂, pp. 63-85。

1986 「アフリカ・カンバの家族」原ひろ子編『家族の文化誌』弘文堂, pp. 99-116。